

### 「読書感想文コンクール」を実施しました

葛飾区では、教育振興ビジョンの取組の一つとして、児童・生徒の読書活動を推進するために「読書感想文コンクール」を実施しています。

今年度は、小学生1万6千898点、中学生5千364点の応募があり、その中から、次の最優秀賞・優秀賞・佳作が選ばれたほか、329人が入選しました。

#### 小学校低学年の部

##### 最優秀賞

の場 詩歩 (まとは しほ・奥戸小2年)

##### 優秀賞

上野 楽喜井 (うえの らつき・金町小1年)

山下 穂 (やました みのり・川端小1年)

##### 佳作

石川 瑞姫 (いしかわ みずぎ・清和小1年)

上野 杏樹 (うえの あんじゅ・原田小2年)

堀田 漣之介 (ほった れんのすけ・青戸小2年)

#### 小学校中学年の部

##### 最優秀賞

南 咲良 (みなみ さくら・西小菅小4年)

##### 優秀賞

板橋 海翔 (いたばし かいと・西亀有小3年)

佐藤 瑞姫 (さとう みずぎ・白鳥小4年)

##### 佳作

栃折 萌波 (とちおり もなみ・清和小3年)

弥永 優希 (やなが ゆうき・飯塚小4年)

渡辺 暖果 (わたなべ はるか・木田小3年)

#### 小学校高学年の部

##### 最優秀賞

松村 歩美 (まつむら あるみ・西小菅小5年)

##### 優秀賞

大久保 百花 (おおくぼ ももか・小松南小6年)  
 竹内 健人 (たけうち けんと・末広小6年)  
**佳作**  
 阿久津 百香 (あくつ ももか・南興戸小5年)  
 鬼形 碩 (おにがた みつる・飯塚小5年)  
 高木 涼也 (たかぎ りょうや・上小松小6年)

**中学生の部**

**最優秀賞**  
 蔭山 晴菜 (かげやま はるな・立石中1年)

**優秀賞**  
 大町 彩菜 (おおまち あやな・亀有中1年)  
 黒沢 覚洋 (くろさわ あきひろ・一之台中1年)  
 出水 万結 (みづ まゆ・亀有中2年)

**佳作**  
 安藤 玲樹 (あんどう れいじゅ・葛美中2年)  
 石川 日南 (いしかわ ひな・四ツ木中2年)  
 佐藤 和呼 (さとう わこ・一之台中2年)  
 重森 智輝 (しげもり ともしき・四ツ木中3年)  
 鈴木 洋太郎 (すずき ようたろう・金町中3年)  
 廣瀬 愛菜 (ひろせ あいな・新小岩中2年)

(敬称略・同一賞内は氏名の五十音順)

指導室 0556554(8)469



### 中学生の部・最優秀賞 「青い鳥」を読んで

立石中1年 蔭山 晴菜

人生で大切なことは何だろう。私は、この本を読んで改めて考えました。

この物語は、国語の先生なのに言葉がつかかえてうまく話せない吃音という病気をかかえた中学非常勤講師の村内先生が、色々な思いを抱えた生徒達と向き合うお話です。村内先生は、生徒にそっと寄り添い、心にしみる言葉を投げかけて元気づけていきます。その中でも、私が特に心に残っている生徒がいます。

場面によって黙り込んでしまう場面緘黙症という病気を抱えている中学三年生の女子生徒、千葉知子さんです。言葉を発さないかわりにいつもポケットに手を入れて、ハンカチを握りしめています。そうすることで、心を落ち着かせて、自分自身をコントロールしているのです。

私は、このような病気があることを知りませんでした。知子は普段どのような気持ちで学校生活を送っていたのだろう。きっと不安で不安で仕方がないのだろう。私はとても心配になりました。知子は、指の力をゆるめてハンカチから手を離すと、心まで一緒に体から離れてしまいうような気がするのです。私は、今すぐにでも知子がいる所へかけ寄ってあげたくなりました。でも、もし知子のような子がクラスにいたら、正直どうやって接したら良いかわからないかと思いました。見守ることはできても、実際に何か行動に移すことは難しいと思います。

でも、クラスメイトの真澄美は、手探りでハンカチを握りしめている知子を見て、「ポケットがなかつたら、ただのデブネコロボットじゃない。」と言います。それから、知子の表情を読み取って会話をどんどん進めていきます。そんな真澄美のように、他のクラスメイトと同じように明るく接してくれる人達の優しい気遣いや思いを、知子は痛いほど感じていたのではないのでしょうか。そんな思いも、ハンカチに閉じ込めていたのでしょうか。

ある日、知子は村内先生と二人きりの時間ができました。村内先生を見て、知子が改めて感じたことがあります。話すときはいつでもどもどもつつかえたら、皆には『ムラウチ病』と言われているし、子どもの頃からずっとそうだったの

か、死にたいとか、もう学校に行きたくないとか、今まで思わなかったのかと。そう思った知子は訊きました。「先生：なんで、先生になつたんですか？」と。私は、知子と同じ気持ちでした。人とあまりしゃべらずにすむ仕事は、他にいくらかもあるのに、なんで学校の先生という職業を選んだのか、ましてや国語の先生です。私も答えを知りたくなりました。「俺みたいな先生が必要な生徒もいるから。先生には、いろんな先生がいたほうがいいんだ。生徒にも、いろんな生徒がいるんだから」村内先生は、そう答えました。私は、村内先生が自身の吃音という病気を、知子の場面緘黙症も個性として受けとめているのではないかと思いました。でも、自分のように思いを上手く言葉にはできなくて、ひとりぼっちで辛い思いをしている人がいる、そんな人達の心にそっと寄り添い力になりたいという思いが村内先生の答えから分かったような気がしました。

卒業式が近づき、名前を呼ぶ練習をする村内先生が、上手く言えずに悔しそうにため息をついたという場面でも、私は、先生は強い人だと思いました。失敗しても、何度か度もつかえませんでした。生徒一人ずつ顔を見て丁寧に名前を呼んでいたのです。先生の本当に伝えたいことがあるなら、どんなに失敗しても、自分で伝えなくてはいけないという強いメッセージと、知子を心から応援する優しい気持ち伝わってきて胸が熱くなりました。きつと、知子にもその思いは伝わっていたのでしょうか。

知子は、村内先生に会えて本当に良かったと思いましたが。私は、二人の間に言葉よりも大切なものが見えた気がしました。共に日々を過ごしていく中で、辛いこともあつていい。でも、そんな時そっと寄り添い勇気づけてくれる人がいることで、どんなに心が強くなれることでしょうか。そして、自分の気持ちに素直になることで、人と人との間に優しく穏やかな時間が流れ、信頼関係が生まれるのではないのでしょうか。私も村内先生に出会ってみたいと思いました。そして、もう一度考えてみました。人生で大切なことは何だろうと。人は一人では生きていけません。私は、相手を思いやり、分かち合うことだと考えました。いつかまた、この本を読んで考えたいと思っています。本当に大切なことは何かを。